

飛鳥井雅有の文芸

斎藤清衛

日記ものが、文学の一ジャンルとして愛読されていることは誰も気付いているとおり。王朝文学としては、蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記などについて精細な研究が出されて居り、近代では「北村透谷日誌」「ふところ日記」(眉山)「漱石日記」「日記」(林芙美子)などそれぞれに愛読されている。しかし、日記が完全に文学の一ジャンルと看られうるか、否か、についてはなお疑問が出てくる。すくなくとも、初め支那中国で用いられたように、日記が官庁の公事を記録した範圍のものでは、そのまま文芸というわけにゆかない。史実の記事だけでは、文学としての価値を発揮するところが出来ないからである。

日記の性質は、いろいろの種類に亘っているが、その本質は「日づけをつけた記録」と解すべきものであろうし、例えば公には「内記日記」「外記日記」の類が考えられ、私的には「真信公記」「小右記」「台記」の類もやはり日記に相違ない。しかし今日「何々日記」と呼ばれている王朝時代のもので、日次の明記されていないものが基だ多い。例えば、「紫式部日記」の如くであるが「紫式部日記旁註」をかいた壺井義知は、その跋文の中において、

「然ル此書本非モト日次之依ニ、而呼モ之曰ク日記、
者未ハ審ナラ姑且依テ旧題ニ不ニ輒改メ之云々」

と考証している。随想随筆ではあっても、日次が無いから「日記」と称することは、不都合だといふのである。近代の有名作家の全集の中に、作者の日記が輯録されている例は珍しくない。ただし、永年に亘って毎日記事を精確に書いたものはほとんど見当らない。とかく日常生活が放埒に流れやすい文士には綿密に事を仕上げる根気が無いことにも原因していよう。例えば、「北村透谷集、勝本清一郎編」には、「透谷子漫録摘集」と題し明治二十二年以降二十六年までの日記を載せているが、二十二年度はわずかに四月一日、同十二年、八月十五日の三条が出てはにすぎない。二十三年の一月の日記は全く缺けている。つまり漫録なる所以であって、毎日缺かさず、自己の行動や感想を毎年怠らずに書くことは、特殊の性格所有者に限られているようである。従って、日記の名を持ちながら、内容は、後からの思い出であったり、随筆集であったりする実例のものが多い。これは、某作家の書簡に着目する時と同様であるが、日記にせよ、書簡にせよ、目的をもって書かれたもので、その

中に文芸美があったとしても、それは第二次的である。例えば森岡外や夏目漱石やの遺物の書信が注目されているのは、これら作家伝の資料として要視されるので、その文芸的価値が問題とされているわけのものではない。

古典を顧るに、日々記が文学の領域を保っているのは、紀行文学である。もとより、紀行も、ともすれば記録に偏しがちな傾向を持っているが、最古の紀行物、即ち「土佐日記」を始めとして、旅に抱くさまざまな情感が写し出され、郷国を遠ざかれれば遠ざかるほど、奇異美麗の山川を眺めて、これを文に描き歌に詠むということになる。その点、日記文学の形態を持っているもので、今日最もしばしば看られるものは、やはり紀行日記物である。ただし古代のもの、紀行の年月日を明記しないものも屢々あるのであって、土佐日記なども承平五年の旅であるのに

「その年の十二月しほふの二十日はつかあまより一日ひつひの日の戌いぬの時に門出かどです」と、出発の日をほかして書いてある。更級日記も「十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る」と書いているだけで、それが寛仁四年であることを省略している。

しかし、中世に鎌倉幕府が設けられ、京阪と関東との交通が発達した後、公記私記の類と同様に紀行文学、詩歌の題詞類に年月日を明記するものが漸次に増加した。中世文学の中で著名な「海道記」には、「貞応二年卯月の上旬五更に都を出で」とあり「東関紀行」

には「仁治三年の秋八月十日あまりの比ちよ、都を出て東へ赴く事あり」とあり「十六夜の日記」には「比ちよは、(建治三)三冬たつはじめの定なき空なれば、ふりみふらずみ時雨もたえず」というように叙している。つぎに、「十六夜の日記」の筆者阿仏尼と縁があり、ほぼ同時代であった飛鳥井雅有の著「無名の記」「嵯峨のかよひ路」「もがみの河路」「みやこ路のわかれ」「春のみやま路」を中心に、当時の飛鳥井派や二条派やの文人が、文芸に自らをいかに生かしたか、その心裡を以下において検討して見たい。

凡そ、国史を通じ、公家階級と武家階級との対立が表面化されて文を重んじた皇室中心の公家の崩壊が露出したのは、史上承久の乱(一二二二)に優るものはない。この乱は、鎌倉幕府の尼将軍(政子)が、東海、北陸、東山から大軍を入洛させ、二カ月で終結を見たのであるが、公家方の後鳥羽上皇は隠岐、土御門上皇は土佐(後に阿波)、順徳上皇は佐渡へというように御流し申され公家の所領三千余が没収され、すべてそれらは新補の地頭に分与された。皇位は順徳・仲恭というように即位させられたものもまったく人形天子に過ぎなかったのである。京都の六波羅には探題が置かれ、公家への監視が続けられ、皇室は全く無能に近い状態に陥った。いわば永年続いた文が武に制された形である。その大事件の際に名歌人家隆は六十三才、定家は六十才になっていた。すべて北条氏の使命によらざるを得なかった定家の一門、即ち二条家の子々孫々は生きゆく

道を如何ように考えたか。その一例として、定家の子、為家（一一九八—一二七五）について看ると、かれは光家や清家やという父の側室の兄弟を超えて、歌系を継ぎ、五才の時従五位下に叙せられた。関東の権門宇都宮頼綱女を正室とし夫婦の間に為氏や為教を生んだ。正室逝去の後に後妻として四条（これが阿仏尼）を迎え冷泉為相と為守とを生んだ。かつ正元元年（一二五九）所有の庄園三箇所を嫡子の為氏に譲った以後、為氏に不孝の行動があったというのでこれを取消し為相に譲ろうとしたことから、為家の歿後、遺産争となり、母阿仏（四条）が鎌倉幕府に訴訟をするため東下した時の紀行が前記の「十六夜日記」となったのである。阿仏が相当の才女であったことは日記文の格調の高さによっても推定される。ところが為氏の正室は、新古今集撰者の一人である飛鳥井雅経（正室は、武人大江広元女）の子息教定（正室、北条実時妹）の子になる雅有の姉であった。当時、公家が武家と縁組をして、幕府方に阿諛しようとしたものは、独り飛鳥井家だけでなく、没落過程の公家としては、好箇の手段となつたので、かれらには有名無実の官職につき、文才をもって武人や庶民級を指導することが、生きる上の唯一の方向とされたかのようである。

さて雅有の父教定は、右兵衛督につき、位は正三位まで昇つた。雅有は幼名「雅名」と称し仁治二年（一二四二）生れ、名門の子息という点から、はやく二才の時、従五位下に叙され、十一才の年、

侍従となつて位も従五位上に昇進している。母方の祖父北条実時は、弘長三年（一二六六）、即ち雅有二十八才の年に逝去したが、雅有はその翌々年正四位下、右中将に任ぜられている。

ところで、昭和初期になり、雅有には日記が遺されていたことを、偶然のことで佐佐木信綱によつて発見された。その一部が文永四年の述記となっている。ただし、その一部は冒頭が缺けて「——ねんぜらる。云々」から起筆されているため、佐佐木信綱はこれに「先ず「無名の記」という仮名を附された。「仏道の記」というのが初名かと臆測されているのは、亡父の法会のため、実時との関係で鎌倉に住したものを、殊更に、教定の旧荘園地のあつた播磨に旅し、翌年引返し再び伊勢まで東下した紀行になっているからである。およそ中世だけで、あれこれ十餘種伝えられているが、鎌倉幕府のために、京阪と関東との間を旅するものが益々増加し、自ずから近世で看る五十三次の名所が固定した。「東下り」のような歌謡類もその間に作られたものらしい。歌学の家系を継いだほどの雅有の如き、東海道の往復をかさねるだけ、紀行の筆を執るに到つたものと推察される。「無名の記」は、遠江国橋本宿あたりから、尾張国鳴海浦、同濱津、同黒保など上京途中の宿名が出ているが、雅有はその間乗馬である。しかし、遊女や白拍子やを宿に呼んで、酒宴遊楽するのを好んだらしく「れいのみみ」（遊女）「一日とどまりてあそぶ」（遊宴）という類の記述が多く出て居り、京都では、嵯峨

の山荘に立ちより一日を暮らしている。続いて

八月十五日、こそのはいとげんとおもへば、まだあかつき、
明石

あかしへと心ざしていつ。なにはのこのことよしとはなけれど、か

たのやうにつぶくる。女三人ばかりして、おとも、そのかた

ばかりなる十人ばかりして、こまなべてゆく。いくたのもりは、
生田

君すまねばことふ事もなく過ぎぬ

すべて、歌人、それも二条派歌人らしい筆のはこびである。雅有は

復任して正四位下、右中将である。しかし文中に挟まれた歌調を味

うに、姉の夫為氏、その為氏の父為家の平板濃厚な歌調に類し、新

古今集の名歌のように特色ある幽玄味や絢爛さが無い。摂津では生

田森、和田傘松、一の谷跡、須磨を経て明石に着いたことを縁語や

聯想などを通して次のように詠んでいる。

あしのやの浦よりうらにつたひきて明石もすまもけふみつる哉
葦屋 須磨

雨天の中を船で沖に出たところ、幸ひに空が晴れあがつた。そこで

「ふねのうちにて、さけのみ連歌して、四五へんあはちしまあかし
酒 淡路島 明石

のあはひをこぎまはるほど、ふえとりいで、をりにあひたるてり
間 折

しふきて、海宵楽ふくに、おもほえずこぎくる舟より、さうひちり
吹 蕭

きをふきあはせたり。折からいひしらずおもしろし。一二反して、

ひんがしのふね、にし西のふね、こゑたつることなし。あかつきがた
東 小夜千鳥

になりぬれば、いその松かぜ吹きまさりて、うらづたふさよちどり

の声も物さびし。」などと記している筆致、雅有の文才あったこと

を示している。すべて、徹夜で遊樂するのは、王朝以来公家の風習

であったが、雅有は特に酒を嗜み、音曲を愛玩した。しかし雅有に

とって、現実の世界は、酷しく悲愴に満ちた世界であった。宗尊親

王將軍（後醍醐天皇子、亀山現帝の令兄）の御隠謀あらわれて親王

が鎌倉から、京都に還され給うたのは昨年のこと。基政（東撰六帖

の撰書）の逝去は本年のこと。なお蒙古高麗が貿易を求めて襲來の

前兆が明らかとなった。雅有は希望通り右近中将となり位正四位下

に昇ったものの、この内憂と外患に対し、いか程、自己の力を發揮

しうるものか。明石には、文永五年正月十日まで滞在しているが、

その間に出家入道し、唐に渡ろうとしたある旧知のものが偶然に訪

ねてきた。雅有は蒙古襲來の気配あることを語り、明石の北方五十

町ばかりの山間（その地は前開か）にあった旧寺の跡に入庵せし

め、雅有も友を時折訪ねて座禪することもあった。

此日とら比あらしいとはげしき夕ぐれ、心のすむにまかせてゆきぬれ

ば、日は入りぬ。やがて止観の正修行の所よみ、だんぎして、座
談義

ぜん時をうつすに、しばがきのましろくみゆるに明ぬる心ちして

松のとを戸しあけたるに、霜夜の月ひかりことにきよく、心のや
押

みもはれぬべし。庭にたちいで見るに、三千世界はまなこのま
水

へのこはりのほか、しくものぞなき。木ずゑをわたる嵐にたぐふ
猿

峰のましろの声、のきばにたむ岩根をおつる滝のひよき、また

なくあはれなるは、かゝる所のすまゐりにや、云々」

ともその折の状況を描いている。正月となり、京都に帰る途中では水無瀬での歌が出ているばかり。その後、四月末に小橋、伏見、宇治を経て奈良の春日神社に詣で、伊勢の知人を訪ねたところで筆は結ばれている。すべて漫録と見るべきもの、いわば旅中殊更に感じたもの、乃至重要な事件を、時折々に記録し遺したものであろう。

かれの鎌倉下りの旅の目的は何であつたか明らかでない。もとより武家としては異常に学問を好んだかれの舅の実時を訪問することも目的の一つであつたかと思うが、生涯にわたり数回、東下りの旅路を実行している。

ここに「もがみの河池（池は路の誤写か）」という、別の短篇の紀行がある。「もがみ」は、古今集の卷二十の東歌の中「もがみ川のほればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」の歌に依つたもの、別に雅有が陸奥の旅をしたという意味でなく、東海道を幾度となく往復した、ある時の東下の紀行の一種なのであるがその書出しに、

れいのうかれたる身は、しづのをだまきくり返しつゝ、のほればくだるに、あふさかにて」

とあつて歌が一首載っている。その後には、鳴海潟で千鳥を見ての歌、二村の山で雪にふられた歌、おさき河原で雪が朝日に輝いているのを詠んだものなどもあるが、例の橋本宿では、

波こゆるしづえばかりはあらはれて

雷にかくるよ浦の松ばら

と名詞止の秀歌を詠じている。しかし、

さゝ枕ぬしさだまらぬわかれかな

かはる一よの露の契りは

という歌を見れば、やはりこうした宿場女郎と戯れる風習は軽く捨てえなかつたものらしい。一行には、籠に乗つて旅する女性も同伴していたらしく清見が関では、馬をおり海の潜女かづよの姿に興じている。それから、富士山、酒匂、足柄等の歌があるが、おおむね低調平板のものである。ただ結末に「ふるさとかへりきてみれば、やどもありしながら、人もかはらねど、ただたびだちたる心ばかりぞあらぬこゝちして云々」とあるによると、夫人は鎌倉に住み、雅有は郷里を、鎌倉と考えていたものかとも思われる。とあれ、雅有著の中では、もつとも特色の出していない紀行で、簡単にノートしたばかりのもので「もがみの河路」という思いつきの書名をそれにつけたものであろう。

さて雅有の著書で、もつとも重要なものは、「嵯峨のかよひ路」であるが、かよひ路と題名があつても、東下りというような紀行ではない。まったくの日誌であるが、かれと二条為家との交渉を知るには絶好の著書である。「嵯峨のかよひ路」は、前述の佐佐木信綱が新潮社「日本文学講座」の中「鎌倉時代の日記文学」の項で委し

く紹介され、さらに、「古典文庫」の第二十五冊目の「飛鳥井雅有日記」で考証を附されて、(昭和二十四年)学界人の注目をひくこととなったものである。本書は、雅有がさらに入京した文永五年九月からの私記で十一月までに亘っているものであるが、条々に「なが月のなかの十日」とか「十六日」「十七日」というように日附がはつきりと附されている。

先ず「嵯峨のかよひ路」を見ると次のような文体で書初められている。

すぎにし春のむ月より、あしやの里をすみはなれて、花のみやこ革屋
に帰りのほりたれど、はやくよりやまひ身をさらぬものなれば病
ちかきまりの名のみして、雲井のよそにへだたりて、をぐらの小介
山のふもとに、はなる人の山里あれば、こもりゐて月日を送
る。いにしへ前中書王のすみ給へるあたりなれば、いとなつかし分
く都のすまゐも物うくて、心をやしなふばかりをとるかたにてあり。

雅有は望んで近衛中将となったものの、病のために奥地の嵯峨に独住閑居せざるを得なくなった。前中書王とは、醍醐皇子兼明親王(九一四—九八七)のことで親王は、天資豪邁博学の性で、嵯峨小倉に雄蔵殿を造営してそこに侘び住まいされたことで有名。その小介には、定家の子為家も康元元年(一一五六)すでに老翁となって退官し、出家して隱栖していた。雅有も、為家の子息為氏が姉の夫

であるという因縁もあって、為家の中院の山荘を訪ね「土佐日記」「更級日記」「紫式部日記」「蜻蛉日記」などの古書を借覧した。九月十三日名月には、雅有は弟の基長を同伴してその為家の荘を訪ね月百首詠を示されたこともある。雅有は「月前浦」という題で、

みくまの浦よりをちの秋風に、
霧のよそなる月を見る哉

という一首を詠出した。同月十六日は時雨空であったが兄弟は再び同伴して訪ね、伊勢物語の難解な辞句を問いただし、連歌会などを催した。連歌は、鎌倉時代以後、徐々に普及していつて、宮廷の中でも歌会の催しを見るに到った。連歌の妙味は、辞句の聯想やユーモアの着想にある。従って、古物語、特に源氏物語などの知識を必要とする。その日の連歌会が動機となったか否かは明白でないが、雅有は翌日十七日から、為家の後妻阿仏尼を講師として、源氏物語全説会が企画した。阿仏尼について

講師にとて、女あるじをよばる。すのうちにてよまる。まことに讀
おもしろし。よのつねの人のよむにはに似ず。ならひあべかめり。

と賞揚している。才女のことであるから明治時代の晶子の口訳源氏のように当然特色があったのであろう。毎日つづけて聴くわけにはゆかなかつたろうが、次の順に聴講の次第が記せられている。

九月 十七日 桐嶺・帚木・空蟬・夕顔・若紫
同月 十九日 末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木・花散里

同月二十日 須磨・明石

同月二十一日 落標・蓬生

同月二十三日 関屋・絵合・松風・薄雲・権

同月二十四日 少女・玉鬘・初春

同月二十六日 胡蝶・螢・常夏

同月二十八日 篝火

十月一日 行幸・藤袴・真木柱

同月二日 梅枝・藤裏葉・若菜・柏木

同月九日 横笛・鈴虫・夕霧

同月十日 御法・幻(雲隠) 勾宮・竹河

同月二十九日 橋姫

十一月一日 椎木

同月八日 總角

同月十四日 早葦

同月二十日 宿木・東屋

同月二十一日 浮舟

同月二十三日 野鈴

同月二十四日 手習

同月二十七日 夢浮橋

いずれ、為家が難語句の解釈指導にあたったものであろう。当時、父光行の後を受けて源氏物語を研究し、いわゆる河内本を作り、

「水滸抄」を完成したのは有名な源親行であった。この親行は前河内守であり、東関紀行の著者でもあるが、雅有とは知友の關係にあつた。ただし、親行は、東関紀行の文体にも現われているように、為家や雅有やに比較すると何となく高い格調を持っている。東関紀行の起筆をみても、

齡は百とせの半に近づきて、賢の霜漸冷しと雖も、なす事なくして徒にあかしくらすのみにあらず。

と自己をありのままに語り述べているところ一種の風格を示している。しかし、表現の風情、雅致においては雅有のものが源氏物語に接近しているとも考えられよう。雅有は、為家阿仏の夫妻と、この親行との両側から源氏物語の指導をうけたものようであった。

為家は出家の身ながら豪酒家で、源氏講読の後には一同酒宴に興じている。若菜まで読んだ第一日の模様を述べて、

夜よにかゝりて、さけのむ。あるじ(注、為家)がたより、女二人を、かはらけとらす。女あるじ(注、阿仏)すのもとによびよせて、此あるじ(注、為家)は、千載集の撰者のむまこ、新古今・

新動撰の撰者(注、定家)の子、続後撰・続古今の撰者也。まらうど(注、雅有)は、同新古今撰者(注、雅経)のむまこ、続古今の作者也。むかしよりの歌人、かたみにをくら山のなだかきすみにかにやどして、かやうの物がたりのやさしきことどもいひて、心をやるさま、ありがたし。此ごろの世の人さはあらしなど、むか

しの人の心ちこそすれなど、やう／＼に色をそへていはる。おとこあるじ(注、為家)、なまけある人とし老おいぬれば、いとど別あがれぬ。……と被している。すべて優趣の、あふれた口吻と見るべきものである。飛鳥井家は、古くから歌麿の家柄として名高く雅有はしばしば京にあって、麿の会に出席しているのみでなく、関東に旅した時は、実時にその技の指導をしている。為家の子が為氏、為氏の子が為世であるが、九月二十一日、深淵、蓬生を読んだ時、為世も同席していた。雅有は、その為世をみて、

まりも重代のことなり。そのうへ十二にて院(注、朱雀院)御まりにまゐりて、あげまりし、其時も人にすぐれたりといひしぞかし。そのまちは、あづまにあれば、たぐひなき名をのみきゝつたへてみず。たま／＼兵衛将(注、為世)あり、一あしなりともあるべしとて、やがて庭にたゝる。春のころよりせめらるれど、いたはりとして、いまだいでつかへず。人のものにて、かやうにけち掲懸掲なるあらはのあそび、かた／＼はどかりありて、なをいなべ猶ど、七十二のおい入道(注、為家)たゝれて、ひらにせめらるれば、かつは歌の師といひ、おとなしき人のめいといひさのみは、かへさひがたければ、はだかあしにてたつ。

など語つたその次第を敘しているが、その文調が平淡で充分に実味をおびている。

その後雅有は病がちとなり、他の催しの会を休む時が多かつたらしい。しかし九月二十九日には、次のように大井河の秋景を眺めに
出かけている。

廿九日、けふは秋はつる日なれば、かしこにわたりて会あるべけれど、心もなやましければゆかず。さるほどに、いかど、けふは大井河にて秋をしむ歌よまざらんと、そそのかす人あれば、のりぐしてゆきぬ。夕づくひ山のもみぢにう(つ)ろひあひて、ときおそき色／＼みえわかれて、をくれさきだつ露のけぢめもおもひしる。みぎはのあしの花、きしの雪かと、げにぞみゆるや。御所(注、龟山院か)のまへなるもみぢのことに色ふかき木のもとをしめて、三首の歌をよむ云々

閑居の鏡娥に遠からぬ大井河のことであるから、特に紅葉で名高い河辺へ行楽に出かけたのである。もとより和歌も詠じたが、彼としては自信を持っていないらしく見えた。

十月に詠出した歌では次の二首が佳作である。

冬落葉 愚詠

まよひつるみねの村雲空暗て時雨を

のこす山のもみぢば

冬霰

冬きぬとまさきのかづら色かはるは山を

かけて霰降也

共に、新古今調の製踏模倣とも見られようが自然美の把握に格調の高いものがある。後歌は、古今集の歌「み山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり」を本歌として作ったものかもしれないが、古今集のものとは別趣の味が出ていてよい。十月五日の源氏物語講談会では、雅有が阿仏尼にすゝめられ、源氏物語に出てくる和琴で倍曲ばいぢうを奏している。かれの多趣多様の才能のほども推し計ることができると思う。為家夫妻も雅有の来訪に生活の慰めをえて、ただに和歌会・連歌会の興のみでなく、同十日の会のように朗詠、詩唱（原文「しとう」とあり）が催され、二十三日からは連日に白拍子白拍子を呼んで舞曲をさせ遊んでいたらしい。「よに入て返たれば、おくれたるとぶらひとて、しらびやし二人きたれり。これはゆかりある女の、これにあれば、それにつきて、いつもいつもうち外内とよふことなき物なれば、れいのなれがほにきてねたり。おこして、すこしあそぶよしなり（十月二十三日条）——などと敘述しているが、芸能文才に長けていた遊女が、公家階級の慰めとなつていたこと、特に雅有がその芸を好んでいたことを想像することができるといふ如きも、雅有の性格の一面であらう。

回顧するに年齢二十一、二才で万葉集を愛誦した源実朝が、金槐和歌集を編したのは約五十余年前のこと、僧日蓮が「立正安国論」を書いて北条時頼に贈呈したのは九年前のこと、仙覚が万葉集を香

写して遺してくれたのは三年前のこと——何か従来の因習、保守的態度に、疑惑を持ち反逆しようとする小數者は現われたもの、これという抵抗を露出するに到らなかつたのである。その前年文永五年閏正月には蒙古高麗の使者が、九州太宰府に來て通商を求めたので、二月に幕府はその国書を宮中に呈し事件の裁断を伺つたが、朝儀の結果外使を追い払い、更に六年三月蒙古高麗使節が再び対島に來て返隙を求めた時、島民を掠略するに到る事件も生じた。政治力の無能を自覚する外に、公家の往き方はなかつたらしい。武家に対し隠謀されたとの理由で鎌倉から京都に返された中書王宗親皇王は、例年二月に行われた「後鳥羽院忌日三首会」など、内裏恒例の詩歌会の類を唯一の娛みとされていたようである。詩歌・音楽・蹴鞠等に天才であつた雅有も、卅一才の壮年の身を他に伸ばすことを知らなかつたものの一人であつたらしい。

ただしここに附言するならば、漫筆ながら日記をつけたかれの意気である。十一月の記事は、特に簡略の嫌いもあるが、二十六日の蹴鞠会の記は、かなり委細に書かれている。

廿六日、ことさら風ふかず、くもらず、冬ながらさむからぬ日にて、まりの日によし。ひつじのはじめに、白あをのかりぎぬう

す色のきぬ、同色のさしぬぎ、侍従（注、基長）もえぎのかりぎぬに、あをうらのきぬ、うす色のさしぬぎ、大夫ねりぬぎをそゝぎて、もみぢをかきたるあをうらのひたゝれくすのはかま、二条

衣

中將入道、こきすみぞめのころもはかま、もとよりよびたれば、四人ひとくるまにのりてゆきぬ。中院（為家邸）のつり殿にて、沓沓つはく。むらさきしらのしたぐつ、ゆひをあいかは、中將入道、これよりくつしたぐつをまうく。あうむのまろのふすべがは侍徒すはまのふすべがは、大夫桜のちり花のあいしやら、この程に、大納言入道、庭のさにつく。（下略）

蹴鞠の技は、中国から伝来し、文武天皇大宝時代公家のスポーツとなつたといわれるほど技術にいろいろと故事がつきまといっている。

和漢三才図会（七）に

飛鳥井家、世以爲ス蹴鞠師祖ト庶流分稱ス難波家ト學レ之者裝束袴等有リ階級ヲ得テ三家免許ヲ著レ之

と出ているように秘伝の点でも雅有は名高く、鎌倉に下れば、北条の一族その他の武家に師範者として仰がれたわけである。右に引用した一節は、当時蹴鞠を遊ぶ時の被服の大様を知ることが出来ると思ふ。

後二条殿二月の比、白河斎院へ参り給ひて御鞠の会有りけるに、しばし有りて、かさ笠簀みのきたる童扇をさして、片手に蒔絵の手箱の蓋またに薄様敷きて雪をおほく盛りて日隠の間の御縁におきて帰入りにけり。御あせなどたりげにて、日隠の間に沓はきながら御尻かけて、御手などにてはとらせ給はで、桧扇のさきにすこしくひてなりけるが、しみたる雪にて御直衣にかよりたりけるが

とけて二重裏にうつりていでむら／＼に見えける。さて御鞠有りけるいとうつくしうやさしくなん侍りける。

これは古今著聞集（十一）の中の一文であるが、かような光景も見られたものであろう。

文永六年雅有のかかった疾患は、甚しい重病のものではなかったらしい。今のところ文永十二年（建治元年）まで六十年の日記らしいものが残っていないので、その間のくわしい伝も不明である。ただし、その間、種々知人に見られる不祥事は断えなかった。舅の实时は、武人に似ず学問を愛し、関東では唯一の蔵書家であった。しかし文永七年に鎌倉の大火があり、その蔵書の大半が火災で焼失した。文永十年には政村が死去し、かれのため人々の夢詠歌が作られた。同年仙覚も寂した、その年は蒙古が三万の兵を率い、対島を襲ったことで誰も知る年であるが、翌十一年、宗尊親王はついに薨去されたのである。同年九条行家も歿した。長年にわたり国交の問題を生じた元使を北条時宗が竜口で斬るに到つたのもその年であり、雅有がかくまで敬慕した為家が七十八才の老齢で逝去したのもその年のことである。この年、雅有は、鎌倉八幡宮の放生会に、將軍（惟康？）に供奉するため、東下した日記が「みやこ路のわかれ」である。

雅威の筆写本の建治元年というところに「トキニ于時雅有右中將三十五歳」とあるのは、三十七歳の誤記であらう。仙洞に右中將として奉

仕し、多幸に過ごしていたものと思うが、七月二十日賀茂社に参拜
八月朔日出立、数十日にかけて京を離れることが、それだけに心苦
しかったものらしい。

「いとど都のなごり、むかしにもまさりて立ちはなれがたくおほ
ゆ——」と述べているのである。文の景は、「もがみの河路」の
約三倍あり、「無名の記」よりもやや多くなっているが、内容は、
やはり東下りの記であつて、放生会の敘事などつけたしの程度であ
る。旅する途中、京を懐しむ情を歌とした例は、伊勢物語や山家集
等の中に夥しい。優雅な性格を持ち、男女多くの配下から敬慕され
ていた雅有は、特に人々との別離を悲しんだものであろうか。

八月ついたちの曉ふかくたつ。とどまる人／＼みだにをくらんと
にや、車二ツばかりにて、あはだぐちのわたりにたてたる、なが
へのみまへをすぐる程、いひしらずかなし。

と出発の心情を敘している。院の上北面であつたしげきよは、伊勢
国松阪（粟田口の東方）まで見送ってくれ、神なびの森では風くか
ら仲頼が待持して、到頭、鏡の宿を経垂井まで見送ってくれた。
その後途中で出遭つた、全身が白い十一、二才のしろこ、額から鼻
にかけて毛の生えている六、七才の幼児などのことを記述している。
さらに磨針山・不破山・藤川を経て美濃國の垂井・愚侶をすぎ尾張
國の熱田・二村山、三河國の矢矧、遠江國の高師山・浜名・比叡・
菊川・天竜川・佐夜中山を経由することになっている。遺憾なのは

各地で詠んだ和歌を並べているだけで、敘景歌はほとんどない。例
えば、熱田到着のことも

熱田 あつたの宮におりて、しほまだひなんといへば、まつほどかれ
飯 乾

いふなどくひて、なが／＼しければ、みちのたむけに、季有とい
ふひちりきふきめして「庭火」「からかみ」「あさくら」ふかせ
てたてまつる。しほすでに干くといへば、いそぐ道なれば、いま

干 だひはてぬ波を分て行く中／＼おもしろし

と敘している程度である。その他、駿河では宇津の山、清見が関
蒲原・富士。伊豆國では三島、相模國では酒匂などの地名が見える
が度重なる往復で、新しい感激もないたためか、十三日鎌倉に入るま
で、これという記事が見られない。ただ、鎌倉到着を

ふるさとに帰りたいれば、みしにもにず、あれまさりたり、こゝに
はたれこそありしかなど、さま／＼むかし恋しくて、めもあは
ず。……

と述べているのは、かつての住宅が火災で見る影もなくなくなっている
のを指したものかと思う。弟と同伴した放生会の模様も簡略に記録
されているにすぎない。実時も、わが身の老を知り、公職を退い
て、金沢（現代横浜市の南、金沢区にある）に住を移し、清原教隆
門人となつて以来、所蔵した書をあつめて金沢文庫とし、内外の僧
俗の人々にも閲覧をゆるす図書館を建てた。武門の企画としては、
まったく稀有な例であつて、その後いろいろの変遷はあつたものの

現代まで伝わっていることは世人の知るところである。総じて銀介は、円覚寺創建以来、禪学がおこり、学僧の往来が多くなり、武門にも詩歌を愛吟するものがあるに到ったが、実時などの思想の影響が特に多かったと見られる。これは直接間接に、雅有の存在と関聯している点である。

以上各論を綜合するに、中世時代において文芸の範圍は、中古時代より宏範である。社会の階級が複雑となり、京都以外の地方に小規模ながら文化が発展したように、文芸の種類もその数を増した。ただし、承久の乱・南北両立争・応仁の乱その他戦乱が続いたために、折角書き記された文献が鳥有に帰したものが尠くない。東海道や山陽道やの紀行の類は何十種以上あったものと推定されるが、わずかにその一部が遺され伝えられたにすぎない。雅有の紀行文などまったく偶然の幸で紛失を免れたものである。由来、日本人は、名所古蹟を見ることに興味を持っている。これは、名所歌、謡曲詞章、浄瑠道行文等でよく感ぜられる通りで、時と金とが許せば、一生の中、一度でよいから、海道下りとか、善光寺詣でかをする事が、唯一の望みとなっていたものらしい。